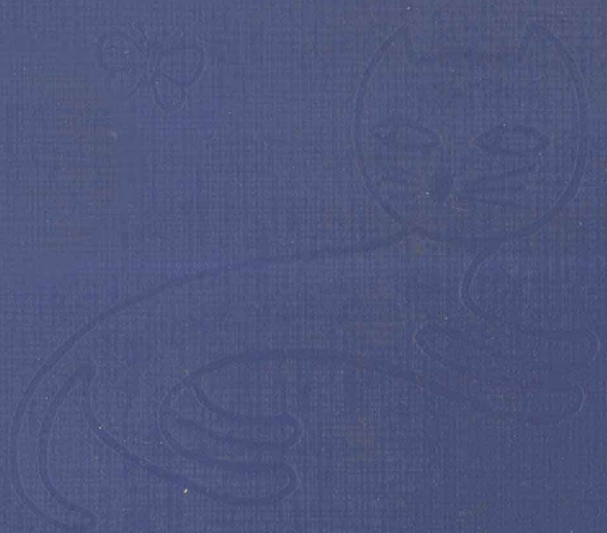


少年少女のための

19

現代日本文学全集



詩

集

責任編集

久伊福

松藤田

潜清

一整人

少年少女のための現代日本文学全集 19

NDC 918.6

少年少女のための

現代日本文学全集19

詩集

定価 二五〇円

昭和三十年八月三十日 初版発行

昭和三十三年二月一日再版発行

発行者 小嶺嘉太郎

発行所 東西文明社

東京都千代田区神田神保町二ノ二二

伊藤印刷株式会社
石毛製本所

この本を読む人に

すぐれた文学者は、この世や人間の、真実や美をするどくみつめて、その作品にはつきりとえがいてくれています。私たちは、それを読むことによって、私たちの心をゆたかに、美しくすることができます。

この本には、そうしたすぐれた作家たちの代表的な作品のなかから、さらに少年少女のみなさんが、読むのにふさわしいもの、ぜひ読んでもらいたいものを、えらんでのせてあります。そして学校で教わらないむずかしい漢字は、かなに改めたり、その意味をしるしたり、またかなづかいも、現代かなづかいになおして、みなさんにしらしみやすいようにしてあります。

その作品も作家のいろいろな面を示すようにしてありますが、あまりに長すぎて、この本のせきれない作品や、もっとおとなになってから読んだほうがいい部分をふくむものは、その一部をとってのせてあるものもあります。その部分のとりかたもくふうして、その作品のあらましを知られるようにつとめました。

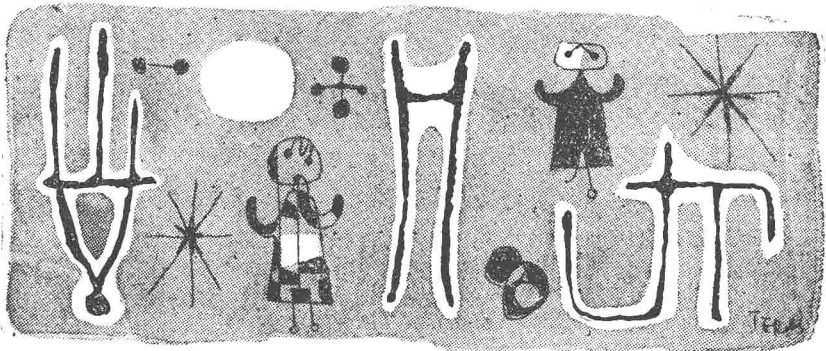
しかし、もちろん原作をこのように改めたといっても、原作の意図およびそ

この解説も、それを書いた人々が、たいへん興味ふかく、親切にしろしてくれておりますので、きつと、作品を読むように、みなさんの心をひきつけてくれるであらう。

久松 伊藤 福田 清人 潜一 整一

詩集もくじ

新体詩抄の訳詩	七
國木田獨歩の詩	一三
島崎藤村の詩	一六
土井晩翠の詩	三
河井醉茗の詩	三七
横瀬夜雨の詩	四
伊良子清白の詩	五四
與謝野晶子の詩	六
上田敏の訳詩	七〇
薄田泣菫の詩	七六
蒲原有明の詩	九三
野口米次郎の詩	一〇八



石川啄木の詩	いしかわたくぼく	二一五
北原白秋の詩	きたはらはくしゅう	二一四
三木露風の詩	みきろふう	二一六
高村光太郎の詩	たかむらこうたろう	二四五
川路柳虹の詩	かわじりゆうこう	二六三
山村暮鳥の詩	やまむらぼちよう	二六七
萩原朔太郎の詩	はぎわらさくたろう	二七九
室生犀星の詩	むろおさせいせい	二八七
千家元麿の詩	せんけもとまろ	二九五
佐藤春夫の詩	さとうはるお	二〇二
堀口大學の詩	ほりぐちだいがく	二一七
西條八十の詩	さいじやうやそ	二三〇
佐藤惣之助の詩	さとうそうのすけ	二三九

そうてい
カッ ト
青山龍水
山本耀也



詩^し

集^{しゅう}

阪^{さか}

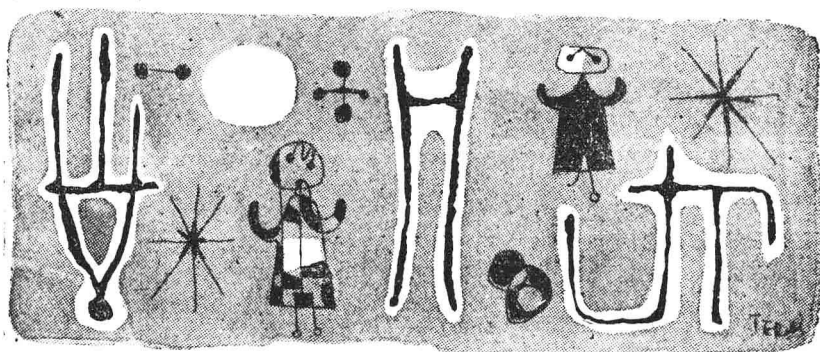
本^{もと}

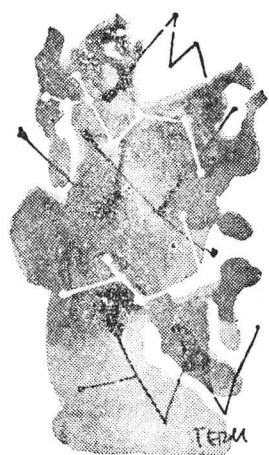
越^{えつ}

郎^{ろう}

詩集もくじ

新体詩抄の訳詩	七
國木田獨歩の詩	一三
島崎藤村の詩	一六
土井晩翠の詩	三
河井醉茗の詩	三七
横瀬夜雨の詩	四
伊良子清白の詩	五四
與謝野晶子の詩	六
上田敏の訳詩	七〇
薄田泣菫の詩	七
蒲原有明の詩	九三
野口米次郎の詩	一〇八





新^{しん}体^{たい}詩^し抄^{しやう}の訳詩

われわれが今日、詩といっているものは、明治の初年に、西洋からはいってきたものです。

明治のはじめ、海外貿易の道がひらけ、古い日本は、新しくわかい日本となりました。あの明治のはじめのころの、文明が海外から流れこんできたいきおいは、すさまじいものでした。その西洋文化の流れとともに、新し

い日の感動をうつすものとして、詩がおこったといってもいいでしょう。

詩を求める心は、常にわかい人のやわらかな心と新しい気持にふれて、その時代の感動の波動をつたえずにはおかないのです。この新しきをもとめ、新しく生きようとする心によって、詩は、どんな時代にも、古い殻を破って、いきいきした新様式を生み出しております。

今日、古風ともみえる和歌にしても、古典となつていゝる万葉集や古今集や新古今集、また今様や俳諧といふたぐいのも、それがはじめられたときには、斬新であり、きばつであり、はつらつとした新様式であつたにちがいありません。詩歌は常に、時代の尖端をいくものであつて、ほかの文学の新しい芽であるといえましよう。

今日の詩の以前にも、日本の詩歌の形式として、和歌や俳句があつたことは、みなさんも知っているでしょう。その和歌を長くした長歌や今様その他のうたいものや、全国のいろいろな土地に生まれた民謡や土俗歌がありました。こういうさまざまな伝統の詩形式が地盤になつていて、その上に西洋種の詩が種をまかれたのですから、

もしもそこに国民のもとめる心がなかったならば、たやすく成長はしなかったでしょう。

新しい詩がはいってくるには、明治のはじめのさまざまなものめずらしい海外文化の輸入にもなつて、国民が何か新しいものをもとめたからです。詩といえは漢詩のことであったそのころのことですから、詩は漢詩の調子をまねしたり、和歌や今様のように七・五調であらわすのが、いちばんふつうでありました。明治以前にも、勝海舟の「思いやつれし君」や中島廣足の「やよいのうた」などは、外国の詩からのほんやくですが、やはり七・五調で書かれています。

明治にはいつて、二年に出た福沢諭吉の「世界国づくし」という世界地理・歴史の本は、おぼえやすいように、七・五調で書かれています。同じ六年に、同じ著者の「暗誦十詞」も同じくわだてですが、これらは、とうてい詩として考えるべきものではありません。これらのちの軍歌や大和田建樹の「鉄道唱歌」「汽笛一声新橋を」ではじまるうたに、影響をおよぼしていますが、明治のはじめに福沢諭吉の書いたものは、詩のような調子をそ

なえているだけで、ほんとうの詩ではありません。

明治も十五年になって、はじめて「新体詩抄」という小さな詩集があらわれました。

そのころ、東京帝国大学教授の三人の博士によって、この詩集がつくられたことで、「新体詩抄」は急に有名になりました。その三人の大学教授は、井上哲次郎、矢田部良吉、外山正一という哲学や植物学や英文学の博士でした。

この詩集は、おもに西洋の詩をほんやくしたもので、シェークスピア、ロングフエロー、テニソン、その他の訳詩十四編と、自作五編とをあつめ、三人の名で出版することになりました。が、そのとき詩集の題になんという名をつけたらよいかに、まよいました。歌とすれば、短歌とまちがえられるし、また長歌としてもむかしの長歌とはちがう。それでは詩とすればよいかといえ、そのころは詩といえは漢詩のことをさすのでした。そこで、三人よって、ちえをしぼって、新しい形体の詩すなわち新体詩といえ、和歌でもなければ、漢詩でもないことがはつきりするにちがいない。こういうわけで、「新体詩

抄」という題名にすることにきまったのでした。これは井上博士の懐旧談にのべられていることです。

ある口の悪い男が、明治には三大発明がある、その一つは人力車、ほかの一つは牛鍋、三つめは新体詩だといったことがあります。

日本人が明治のはじめに、西洋の文物をとり入れるようになってからできた発明品として、日本人の生活や習慣に便利なようにできた「人力車」、食卓にぎわした「牛鍋」と、そして文学の発明品として「新体詩」をあげたことは、なかなかうまい皮肉ともいえましよう。

これを今日からふりかえってみますと、人力車はもはや交通機関としてはいなかのへんびなところへ行かなければみられないし、東京や大阪のような大都会では外国人がリキシャ・マンといって好奇心から乗りまわす乗物で、今日の文明からおきざりにされた明治の遺物にすぎません。ところが、牛鍋は今日でも日本人のこのみになったものとして食卓にぎわせ、外国へ行ってもスキヤキということばで、日本料理を代表しています。

それでは、新体詩はどうなったでしょう。これは明治

の文明がひらけるにともなって生まれた、そのころの文学の一つの形式として新しいものであったにはちがいないのですが、今日では、人力車と同じように、どうしてもむかしの遺物という感じがします。これは明治の三人の博士の発明品ですが、明治という時代とともにその使命も終ってしまったように考えられます。

これでは、スキヤキにもおとると思われかねないのですが、文学はそのすがたがまったく消えたのではなく、「新体詩」は今日の現代詩を生む母体となったのです。「新体詩抄」が出たことは、日本の詩歌史の上で、めざましい仕事をし、新しい道をひらいたのでした。

新体詩抄は、今までの和歌や俳句とは全然性質のちがったものすなわち詩（ポエトリイ）をもとめたのでした。新しい詩に対する態度がここで準備されました。三人の博士たちは、学者でありまして、芸術的な天分にはぐまれているとはいえなかったもので、そのころの国文学者からは、「こっけいとも、りくつとも、文とも、淨瑠璃ともつかぬ怪物だ」と、ののしり、わらわれたものでした。

しかし、和歌でも漢詩でも淨瑠璃でもない、この怪物こそ、新しい日本の詩の種でありました。ことに、漢詩のようなむずかしい文字を用いず、へいぼんな日本語で書くことを教えたところや、すすんで西洋の詩に学ぼうとした態度などは、だんだんのちにあらわれてくる詩人を動かしていく強い原動力となりました。

そのころ、海外貿易がさかんになるとともに、外国語にあこがれ、外国事情を知りたがっていたわかい人々や、文芸に心をよせていたわかい人々は、新体詩というよび名をめずらしく思つて、よろこびむかえたのでした。

新体詩抄の中でも、名訳といわれるテニソンの「輕騎隊進撃の歌」などは、軍歌としてひろまり、そのころの兵隊やその他のわかい人々の口にうたわれたものです。

テニソン氏輕騎隊進撃の歌 外山、山

その一

一里半なり一里半
ならびて進む一里半
死地に乗り入る六百騎

將はかかれの令くだす
士卒たる身の身をもつて
訳をただすは分ならず
答をなすも分ならず
これ命これに従いて
死ぬるのほかはあらざらん
死地に乗り入る六百騎 (下略)

戦場の輕騎兵が將校から進めと号令されて、そのわけをきいたり、答をもとめるのは、身分不相応のことで、ただ命令にしたがつて、死ぬよりほかにない、ゆうかなな六十騎が勢いよく死ぬべき地域に乗り入るということをお歌ったもので、そのころの軍国主義の日本にはめずらしく、ぴったりはまった西洋の詩といえましよう。

こんなふうに一面、新体詩は軍歌として世にあらわれました。明治十九年四月には山田美妙の編集した「新体詞選」が出版され、二十年には佐藤雄治の編集した「明治新体詩歌選」が世に出ました。

山田美妙という人は、明治元年に東京神田で生まれま

した。大学予備門にはいって、小説家の尾崎紅葉としたしくなり、言文一致体（文章と口語とを一致させる文体）の運動をおこした小説家として有名な作家です。この人は、十七、八才のころには、さかんに新体詩をつくり、「新体詞選」の出版がきまって帰ってくると、うれしさになみだを流したといわれる感激家でした。この集には、尾崎紅葉が「書生歌」を書き、山田美妙は「戦景大和魂」を書きました。

戦景大和魂

山田美妙

敵は幾万ありとても、
すべて烏合の勢なるぞ。
烏合の勢にあらずとも、
味方に正しき道理あり。
邪はそれ正に勝ちがたく、
直は曲にぞ勝栗の
かたき心の一徹は
石に箭の立つ例あり。
石に箭の立つ例あり。

などでおそることやある。
などてたゆとうことやある。

みなさんのおとうさんやおじいさんが、こどものころ、さかにうたった軍歌の一つが、この新体詩「戦景大和魂」なのです。

山田美妙は明治二十年には、婦人雑誌「伊良都女」を出し、女性の新体詩を募集してのせました。また自分もさかに詩をかかげ、口語でつくった詩もかきました。二十一年になって雑誌「都の花」の主筆となり、言文一致体の小説を書いて有名になりました。二十四年に出版された「新調韻文青年唱歌集」には、美妙の詩が五十四編、「伊良都女」の投書から集めた詩四十一編がおさめてあります。

美妙は、外山、矢田部、井上等の大学派のように、議論や主張からでなく、芸術的な実感から新体詩を書くようにしました。調子は七五調のほか、五七、八六、五七五、五五など、いろいろな形式をとり入れました。そうして口語の詩を書いたり、句と句の字間をはなして書く形式

をはじめたりして、しきりに新しいところをやつて、
新体詩の發達をうながしたのでした。

うたえ鳥 とり

山田美妙 やまだ びみょう

うたえ鳥！ 愛らしき鳥！

　　ところよき　うたを　聞かせ　よ。

すやすや　と　ねぶりに　つかん、

　　おのずから　嘆き　も　去らん。

うたえ鳥！　うたえや　うたえ！

　　鳥の　歌　われ　は　喜ぶ。

いざ　うたえ、きょう　も　終日 ひなもす

　　ちよちよ　と　いと　ところよく

うたえ鳥！　愛らしき鳥！

　　ところよき　歌を　聞かせ　よ！

花　かおり　風　あたたかく

　　若みどり わか　草葉 くさは　は　うごく

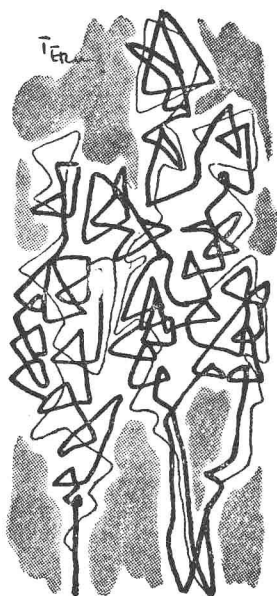
うたえ鳥！　愛らしき鳥！

　　ところよき　うた　を　聞かせ　よ。

(下略)

これが童謡だといったら、今日の人にはわらうでしょうが、文語体の詩ばかりであったそのころには、とても新しい作品であつたのです。この童謡はおそらく、イギリスの童謡をまねて作つたものでしょう。句と句との字間をはなす、いわゆるわかち書きの新形式も、英語文の形式から思いついたもので、のちに岩野泡鳴という詩人がこの形式で詩を書いていきます。

こんなふうに、山田美妙は、口語をなんとか新しい詩に生かそうとして、いろいろころみました。そして、その作品はのちへの影響もすくなかったのですが、生活のためでしょうか、詩をはやくきりあげて、小説のほうにうつてしまいました。しかし、七八年の間の作詩は、そうとうしっかりした作品をのこしています。もしもこの期間だけであつたら、美妙は詩人といつてもさしつかえない人でした。



國木田獨歩の詩

山林に自由存す

山林に自由存す

われこの句を吟じて血のわくを覚ゆ

ああ山林に自由存す

いかなればわれ山林をみすてし

あくがれて虚栄の道にのぼりしより
十年の月日塵のうちに過ぎぬ
ふりさけ見れば自由の里は
すでに雲山千里の外にあるこちす

皆を決して天外を望めば
おちかたの高峰の雪の朝日影
ああ山林に自由存す
われこの句を吟じて血のわくを覚ゆ

なつかしきわがふるさとはいずこぞや
かしこにわれは山林の子なりき
かえりみれば千里江山
自由のさとは雲底に没せんとす

國木田獨歩は明治時代の小説家として有名な人であり
ますが、詩人としても、明治二十七、八年ごろ活躍しま
した。

明治二十七、八年といえは、日清戦争があつて、日本

は清（今の中国）と戦いました。獨歩は、国民新聞社の従軍記者となって、戦地から「愛弟通信」を新聞によせました。この従軍から帰ってから、いろいろの新聞社に關係するかたわら、「新生文林」という文芸雑誌を自分で経営して、自由開放の思想のある浪漫的な特をつくって、発表しました。

獨歩は、英國の詩人ワーズワースがすぎで、またバイロンやテニソンなどの詩にも親しみました。明治三十年四月に出た「抒情詩」という詞華集（たくさんの詩人の詩を編集した詩集）に、はじめて「獨歩吟」を発表しました。「山林に自由存す」の詩もその中の一つです。

そのころの詩が島崎藤村や土井晩翠のつくるような七・五調とか五・七調といった格調の正しい新体詩であったのに対し、獨歩は、もっと自由な新しい詩がつくられることを望んだのでした。かれは「自由」は、「欧州では詩人の熱血である」ということを考えておりましたので、詩とは、どうしても歌わずにはいられない情熱を自由にうたうものだと思っていました。この確信が「山林に自由存す」という詩の中にもよくあらわれていると思

います。

「自由」がこんなにはげしいことばで、詩にうたわれたのは、獨歩の生きていた時代がどんなに「自由」に、あこがれていたかが、察せられます。そのようなあこがれの氣持でこの詩を読むと、わたしたちも心を打たれるものがあります。

まず、この詩のたいたいの意味を書くまえに、わかりにくいと思われることばの説明をしておきましょう。

「山林」は、自然のこと。「あくがれて」は、あこがれて。「虚榮の道」は、見せかけだけのさかえをねがう人生の道。「塵のうちに」は、俗な世間のうちに。「皆を決して」は、目をむいて。

第一連——「自然には自由がある」という、この句を口ずさむと、自分の血はわきたつような氣がする。そうだ。自然には自由があるというのに、どうしてじぶんは、この大自然をみすててしまったのだろう。

第二連——見せかけだけのさかえをねがう人生の道に、あこがれて来てから、俗な世間のうちにもまれて、はや十年という月日をすごしてしまった。ふりかえってみ